

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。

JAPAN
PHILHARMONIC
ORCHESTRA
—— 創立指揮者 渡邊曉雄 ——

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

SUBSCRIPTION CONCERTS

2024

3

MAR

第 758 回
東京定期演奏会

Alexander
LIEBREICH

Robert
SCHUMANN

MIYOSHI
Akira

Karol
SZYMANOWSKI

TSUJI
Ayana



サントリーホール
2024年3月22日(金) 19:00
3月23日(土) 14:00

日本フィルハーモニー交響楽団

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA 758th SUBSCRIPTION CONCERTS


日本フィルハーモニー交響楽団
第758回 東京定期演奏会

サントリーホール Suntory Hall

2024年3月22日(金)午後7時開演 / 23日(土)午後2時開演
7:00p.m., Friday, 22nd & 2:00p.m., Saturday, 23rd March, 2024

主催 / 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団
協賛 / 鹿島建設株式会社 三井不動産株式会社

表紙イラスト / 小澤 一雄

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

三善晃: 魁響の譜

MIYOSHI Akira: Création Sonore

約16分

シマノフスキ: ヴァイオリン協奏曲第1番 op.35

Karol SZYMANOWSKI: Concerto for Violin and Orchestra No.1, op.35

約26分

休憩(15分) Intermission

シューマン: 交響曲第3番《ライン》変ホ長調 op.97

Robert SCHUMANN: Symphony No.3 "Rheinische" in E-flat major, op.97

約32分

指揮: アレクサンダー・リープライヒ

Conductor: Alexander LIEBREICH

ヴァイオリン: 辻 彩奈

Violin: TSUJI Ayana

コンサートマスター: 田野倉 雅秋 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: TANOKURA Masaaki, JPO Solo Concertmaster

ソロ・チェロ: 菊地 知也 [日本フィル・ソロ・チェロ]

Solo Violoncello: KIKUCHI Tomoya, JPO Solo Violoncello

*この演奏会では、目の不自由なお客様のために点字プログラムを用意しております。ご要望の方は主催者までお申し出ください。



©Sammy Hart

Conductor

指揮

アレクサンダー・リープライヒ

Alexander LIEBREICH

ドイツのレーゲンスブルク生まれ。ミュンヘン音楽演劇大学とザルツブルク・モーツァルテウムにて学び、クラウド・アバドとミハエル・ギーレン両氏の薫陶を受けた。現在、プラハ放送交響楽団首席指揮者。ロイヤル・コンサートヘボウ管、ベルギー国立管、BBC響、BBCスコットランド響、ベルリン放送響、ミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、シュトゥットガルト・フィル、ドレスデン・フィル、ルクセンブルク・フィル、チューリッヒ・トーンハレ管、ブルノ国立フィル、ワルシャワ国立フィル、サンクトペテルブルク響、NHK響、読売日本響、マーラー・チェンバー管、ベルリン古楽アカデミー等へ世界各国のオーケストラへ客演を重ねている。近年ではBBCスコットランド響、バレンシア響、カステル・イ・レオン響、オレゴン響、シンガポール響、台北響、オレゴン響、日本フィル、京都市響等へもデビュー。リサ・バティアシヴィリ、クリスチャン・ツイメルマン、フランク・ペーター・ツィンマーマン、ゴージェ・カブソン、アルバン・ゲアハルト、リーラ・ジョセフォヴィッツ、イザベル・ファウスト等、世界的なソリスト達と定期的に共演している。

加えて革新的なプロジェクトもプロデュース、2002年にはコンゲ・ドイチェ・フィルと共に北朝鮮と韓国を訪問、2011年には韓国のトンヨン国際音楽祭の音楽監督にヨーロッパ人として初めて就任、異文化交流を目的とした「イースト・ウェスト・レジデンス・プログラム」を実現、韓国にハイナー・ゲッベルス、ウンスク・チン、マルティン・グルピンガー、細川俊夫、ベアート・フラー等の作曲家の招聘を実現。これまでミュンヘン室内管弦楽団芸術監督兼首席指揮者、韓国のトンヨン国際音楽祭音楽監督、ポーランド国立放送交響楽団首席指揮者兼芸術監督、プラハ放送交響楽団首席指揮者兼芸術監督、リヒャルト・シュトラウス音楽祭芸術監督を歴任。シマノフスキとルトスワフスキの作品集をはじめ、ハイドン、モーツァルト、イサン・ユン、細川俊夫まで幅広いレパートリーのレコーディングをAccentus、ECM、ドイツ・グラモフォン、SONYへ残しており、いずれも国際的に高い評価を得ている。2016年にはバイエルン州政府から文化賞特別賞を受賞。2022/23年シーズンからスペインのバレンシア管弦楽団の首席指揮者兼芸術監督を務めている。



©Makoto Kamiya

Violin

ヴァイオリン

辻 彩奈

TSUJI Ayana

1997年岐阜県生まれ。東京音楽大学卒業。2016年モンリオール国際音楽コンクール第1位、併せて5つの特別賞を受賞。3歳よりスズキメソッドにてヴァイオリンを始める。11歳にて名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演後、モンリオール交響楽団、スイス・ロマン管弦楽団、トゥールーズ・キャピトル管弦楽団、ベトナム国立交響楽団、札幌交響楽団、山形交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、セントラル愛知交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、京都市交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団などと共演している。また室内楽においては、12歳にて初リサイタルを行って以降、宗次ホール、サラマンカホール、紀尾井ホール、ザ・シンフォニーホールにてリサイタルを実施。チェロの堤剛、ピ

アノの江口玲、伊藤恵、萩原麻未、阪田知樹、藤田真央、マルタ・アルゲリッチの各氏らとの共演を行っている。2018年「第28回出光音楽賞」、2023年「第24回ホテルオークラ音楽賞」を受賞。

ヴァイオリンを小林健次、矢口十詩子、中澤きみ子、小栗まち絵、原田幸一郎、レジス・パスキエの各氏に師事。2019年4月、ジョナサン・ノット指揮ノイス・ロマン管弦楽団とジュネーヴおよび日本にてツアーを実施し、その艶やかな音色と表現によって各方面から高い評価を得た。2020年、自らが権代敦彦に委嘱した「Post Festum」を世界初演。コロナ禍にあって国内公演の代役で幅広く活躍したことは、レパートリーを広く拡充すると共に、経験を深く積むことにつながった。使用楽器は、NPO法人イエローエンジェルより貸与のJoannes Baptista Guadagnini 1748である。

2024年2月、権代敦彦が初めて書いたヴァイオリン協奏曲「時と永遠を結ぶ絃〜ヴァイオリンとオーケストラのための」を世界初演した。

プログラム・ノート 解説: 広瀬 大介

■ 三善晃: 魁響の譜

1988年、三善晃(1933-2013)は、雑誌『音楽芸術』において音楽以外の芸術・文学領域における第一人者たち12名と対談を続けた(『現代の芸術視座を求めて』音楽之友社)。辻邦生、鈴木忠志、大江健三郎など錚々たるゲストを迎え、三善は聴き手に回りつつも、その博覧強記ぶりを遺憾なく発揮しつつ、自身の思索を深めるような応答を繰り返している。みずからの人生が第二次世界大戦によって断ち切れ、戦後をなお生きていることの意味(あるいは違和感)を探し続けているのが三善晃という作曲家の宿命であるならば、そのことになんらかの意味を見出そうとする趣きを感じさせる対談集である。

1991年9月23日、この対談とほぼ同時期に構想されたであろう、岡山シンフォニーホールの開館記念演奏会のために委嘱・初演された『魁響の譜 Cr ation sonore』で、三善はあらためて自分の創作活動を振り返ったのではなかろうか。フランス語題名から鑑みれば、「響きを生み出すもの、さきがけ」という、ホールのこけら落としにふさわしい意味だと類推できるが、自身でも創作の原点に立ち返ろうという想いがこの題名・作品に込められているのだろう。以下、三善自身の言葉を二種、紹介する。

昨年、吉備路をはじめて訪れて感じたものはある種の霊的なもの、民族の深層意識が(おそらくは神話の中に)共有する幻想でした。(中略) 曲名の《魁》の字は「さきがけ」であり、“魁方杓”あるいは“魁星”と書いて北斗星の第一星を意味します。ものの始まる前の生命の声、という思いで『魁響の譜』としました。

(岡山シンフォニーホール開館記念演奏会、初演時プログラム、1991年)

ポストモダンという言い方で起こっているある種の回帰現象、つまり、ドミノとかペンタニックとか、そういう小さなアイデンティティに戻ることに反対したい。1960年代に拡大されたあらゆる技法や理論は拡散してしまったけど、やっぱり今、歴史の延長としてそれを踏まえないといけない、そこから先に行くために個々の語法や理論が問われています。今回の作品において、私の語法の論理を使いきったと思います。

(岡山シンフォニーホール友の会会報『フリューゲル』インタビュー記事、1991年)

楽器編成: フルート4(ピッコロ持替4)、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン1、Es管クラリネット1、クラリネット3(バス・クラリネット持替1)、ファゴット4(コントラ・ファゴット持替1)、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、チューバ1、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、銅鑼、ヴィブラフォン、トムトム、カウベル、ボンゴ、シロフォン、グロッケンシュピール、木鐘、チューブラーベル、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部。

■ シマノフスキ: ヴァイオリン協奏曲第1番 op.35

ポーランドの作曲家、カロル・シマノフスキ(1882-1937)。ショパンやスクリャーピン、あるいはレーガーやリヒャルト・シュトラウスといった後期ロマン派作曲家の影響を受けた作風を経た後に、本物の個性を開花させたのは、奇しくも第一次世界大戦の時期と重なった。

1914年以降、イタリア、北アフリカ、フランス、イギリスを旅した作曲家は、大戦の勃発と共に故郷ティモフシユカ(現在はウクライナ領)へ戻り、創作に励む。この時期に集中的に勉強した古代史やイスラム教神秘主義(スーフイズム)が、1916年に成立した《交響曲第3番》や《ヴァイオリン協奏曲第1番》の音楽に、シマノフスキ独自の個性を刻印したことはよく識られるところだろう。

作曲家のこうした発想の根源が、幼少時から親しんだフリードリヒ・ニーチェの影響下にあることはもっと知られてよい。ニーチェが夢想した「汎ヨーロッパ的」な音楽を、この時期のシマノフスキは独自のやり方で実現して見せようとした節が感じられる。

いまや、4曲の交響曲、2曲のヴァイオリン協奏曲の録音は少しずつ数を増しており、歌劇《ロジェ王》は映像でも愉しめる時代となった。シマノフスキの音楽の美質をとことんまで分解していった後に残る重要な要素は、ショパンやスクリャーピンの音楽から吸収したそこはかかない官能性、あるいはシュトラウスの音楽から吸収した精緻きまわるオーケストラ書法と音色であっただろう。

自身でヴァイオリンを演奏することのないシマノフスキにとって、その作曲にあたっては、パヴェウ・コハインスキ(1887-1934)の助力が不可欠であった。1915年に

作曲された《神話: ヴァイオリンとピアノのための三つの詩曲》において、極度に洗練されたヴァイオリン書法を掌中に収めたシマノフスキは、その経験を、翌1916年の夏から秋にかけて作曲された《ヴァイオリン協奏曲第1番》においても遺憾なく発揮する。ロシア革命のため、1917年2月に予定されていた初演は中止されてしまい、第1次世界大戦の終了後、1922年11月までずれ込んでしまった。コハインスキはこの初演を務めることがかなわず、ようやく1924年にニューヨーク、フィラデルフィアで演奏している。

三管編成、単一楽章で構成されている、これほど独創的な試みに溢れている作品を、それまでに作曲された協奏曲の枠組みにあてはめても、得るところは少ないだろう。全体は繰り返し登場するいくつかの主題によって緩やかに結びつけられており、さまざまな聴き方が可能となっている。三つの部分に分かれる、という分析が一般的にもみえるが、この分析に従うならば、やはり重要性において他を圧している第1部の主要主題が、作品全体の統一感をもたらしているというべきか。曲の最後に置かれたコハインスキによるカデンツァは、まるで作曲者自身のものであるかのように全体と一体化しているのも驚くべきこと。

楽器編成: 独奏ヴァイオリン、フルート3(ピッコロ持替1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット3(Es管クラリネット持替1)、バス・クラリネット1、ファゴット3(コントラ・ファゴット1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、チューバ1、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部。

■ シューマン:交響曲第3番《ライン》変ホ長調 op.97

音楽家、そして作曲家としてのロベルト・シューマン(1810-1856)の活動は、おもにライプツィヒの時代(1830-44年)、ドレスデンの時代(1844-50)、そしてデュッセルドルフの時代(1850-54)に大別できる。《ライン》という副題が示すとおり、「交響曲第3番」の名前が与えられた本作は、ライン川のほとりに位置するデュッセルドルフで手がけられた。1850年9月に同地の管弦楽団と合唱団の音楽監督として招かれたシューマンは、早速11月から新しい交響曲の作曲を始め、わずか1ヵ月で5つの楽章からなる作品を完成させた(この作品に限らず、一般的にシューマンは一气呵成にひとつの作品を仕上げることが多い)。

本作は、翌1851年2月6日、シューマン自身が指揮を手がけ、デュッセルドルフ管弦楽団によって初演された。なお、この後に、2番目に作曲された交響曲が改訂を経て53年に初演されており、出版の際に《第4番》とされた。実質的にはこの第3番が最後の交響曲ということになる。

この作品のモデルは、やはりベートーヴェンの「交響曲第6番」《田園》なのだろう。5つの楽章という構成、実際の風景や情景を描く標題的な音楽、という共通点を考え合わせれば、標題的な交響曲を編もうとする作曲家がこの形式に倣おうとするのは自然であろう(ベルリオーズ《幻想交響曲》もこの部類に入るはず)。描かれる情景はまさにライン川くだり。

第1楽章では、航行の難所であった地と、魔女伝説が結びついたローレライが扱われるが、シューマンとしてはかなりしっかりしたソナタ形式を採り、これらを巧みに結び合わせている。**第2楽章**では、コブレンツからボンへ、緩徐楽章の**第3楽章**ではボンからケルンへの道筋を辿る。

シューマンにとって、1850年9月29日に妻クララと旅したケルンの旅はとりわけ印象深いものであったようで、大聖堂の荘厳さに心打たれた様子は、普通の交響曲では挿入されない特別な**第4楽章**の存在で描かれる。変ホ長調(♭=3)の調号は第1楽章のそれと同じだが、その響きは同主短調たる変ホ短調。合間に差し挟まれる鋭い響きは、シューマンがここで感じた敬虔な祈りの表出だろうか。**第5楽章**では、引越してきたばかりのデュッセルドルフに敬意を表し、同地でのカーニヴァルが描かれる。ソナタ形式らしい作りをしてはいるが、第2主題の存在ははっきりとわからない。もしかしたら本来あるべき主題が「仮装」して登場しているのかもしれない。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、ティンパニ、弦楽5部。



PHOTO 1 1月6日 相模原定期演奏会
2024年、日本フィル最初の演奏会は相模原定期演奏会でした。J.シュトラウス2世のポルカやワルツで一気に新年の香りが。沼尻竜典マエストロ作曲、オペラ《竹取物語》ではかぐや姫に扮した砂川涼子さんの歌声にうっとり。和と洋のお正月を感じる一時となりました。沼尻マエストロ、砂川さん、コンマス 田野倉雅秋と



PHOTO 2 1月14日 芸劇シリーズ
ニューイヤーコンサート2024と題して、川瀬賢太郎マエストロと清水和音さんをお迎えしたこの公演。ニューイヤーならではの華やかなプログラムをお届けしました。アンコールは、ニューイヤーといえばウィーンでもおなじみのラデツキー行進曲! 客席のお客様も一緒に盛り上がりました。



PHOTO 3 1月20日 横浜定期演奏会、1月21日 名曲コンサート
首席指揮者カーチン・ウォンと上原彩子さんとともにラフマニノフのバガニーニの主題による狂詩曲、ベルリオーズの幻想交響曲他をお届けしました。幻想交響曲といえば、やはり日本フィルのこの鐘!(まれに他のオーケストラさんへ出張に行ったりします) 打楽器の大河原氏がポーズを取ってくれました



PHOTO 4 1月26日、27日 東京定期演奏会*
秋季東京定期演奏会の締めくくりは、児玉麻里さん、児玉桃さんの華やかなダブルピアノ&首席指揮者カーチン・ウォンの指揮でアジアの響きをお届けいたしました。マクフィーではピアノの配置も特徴的に。



PHOTO 5 2月2日 にじくら〜笑顔とトークと、音楽と〜
テーマは「子供とピアノ」。母になられた小林愛実さんを迎えてのモーツァルト『ジュノム』、大井剛史マエストロ選曲のドビュッシー&フォーレ。愛情溢れる温かな雰囲気がホールを包みました。大井マエストロと小林愛実さん、ナビゲーターの高橋典さんのスリーショットをどうぞ

*印のアーカイブ配信はMember's TVU CHANNELで。
<https://members.tvuch.com>



あらゆる人々へ、あらゆる世代へ、 あらゆる地域へ、世界へ

🎵 日本フィルの弦楽四重奏が岩手県陸前高田市を訪問 🎵

出演：ヴァイオリン／木野 雅之、佐藤 駿一郎 ヴィオラ／小中澤 基道 チェロ／石崎 美雨
共演：けんか七夕太鼓(気仙小学校)
会場：気仙小学校(風のホール)／米崎地区コミュニティセンター

震災後から活動を継続している「被災地に音楽を」の活動として、1月末に岩手県、陸前高田市の協力の下で、市内2か所で弦楽四重奏の演奏会を行いました。これは、今後数年にわたる陸前高田市訪問の最初の取り組みとして計画・実行されました。

陸前高田市は津波により甚大な被害を受けた地域であり、県内で唯一の津波伝承館が作られています。震災後、海岸には高い防潮堤が築かれ、三陸海岸の中で最大のなだらかな平野部は嵩上げが行われましたが、広範囲にわたって今も住居や商店が見られず、震災の被害の大きさを実感させられる景色が広がっています。震災から13年を迎える現在も人口減少が続いており、内陸からの交通手段は鉄道線路が舗装された道を走るバス(BRT)があるのみです。震災後、「奇跡の一本松ホール」という素晴らしいコンサート会場が作られ、多くの慰問コンサートが行われましたが、原点に立ち返り、地域の方々の生活圏を訪問する主旨で集会所や学校でのコンサートを行うことになりました。

気仙小学校では2021年に東北の夢プロジェクトin岩手に出演したけんか七夕太鼓の子どもたちと共演しました。気仙小学校は震災後に高台に再建され、子どもたちの太鼓練習用に作られた「風のホール」は独特な屋根を持ち、音響的にも工夫がされています。6年生の11名が披露してくれた太鼓は勇壮で迫力満点、感動的でした。日本フィルは、陸前高田市にゆかりのある木野雅之のソロを交えたクラシック・演歌・民謡を演奏し、いずれの会場にも多くの地域住民が訪れ、演奏と共に歌い、手拍子し、大変和やかな雰囲気でお楽しみいただきました。来年度以降も、陸前高田市へ訪問する予定です。



▲弦楽四重奏での演奏



▲独特な形状の風のホール



▲米崎地区コミュニティセンター



未来への想像は、紙で広がる。

FSC® 森林認証紙

森林管理に関するFSCの原則と規準では、「森林のもたらすサービスや価値の維持・向上」、「価値のある森林生態系を守ること」などが求められており、生物多様性の保全が図られています。



責任ある森林管理
のマーク